

の王ハ強からん然ぞの大臣の一人これに逾て強かり威權を振えんの威權ハ大なる威權なるべし
 年を経て後彼等相結ばん即ち南の王の女子北の王に過て相好を圖らん然ぞの腕にハかなじたるの王
 ふよりこの腕ハ直ごとを得てこの女どこれ尊ける者どこれを生せたる者どこれに力をつけたる者ハか
 亦時におよびて付されん斯て後この女の根より出たる芽興りて之に代り北の王の軍勢にむかひて來り
 これが城に打ちりて之を攻て勝を得之の神々鑄像ふよび金銀の貴き器具をエソクトに携へざらん彼ハ
 北の王の上に立て年を重ねん彼南の王の國に打入ることからん然ぞ自己の國に退くべしの子等ま
 だ憤激して許多の大軍を聚め進み來り溢れて往來しこの城まで攻寄ん是に於て南の王大に怒り出さ
 たりて北の王と戦ふべし彼大軍を興してこれに當らん然れどもこの軍兵ハこれが手に付されん大軍す
 亦はち興りて彼心に高きり數萬人を仆さし然れどもこの勢ハこれがために増じまた北の王ハ退きて
 初よりも大なる軍兵を興し或時すかはち或年數を経て後かならず大兵を率の莫失の轡重を備へて攻來ら
 ん是時におたりて衆多の者興りて南の王に敵せん又なんぢの民の中の奸惡人等みつから高きりて事を
 爲しつひに預言を去て應せしめん即ち彼らハ自ら休るべし茲も北の王襲ひきたり虜を築きて堅城を攻
 おどぎん南の王の腕ハこれに當ることを得し又この選抜の民もこれに當るかなかるべし之に攻きたる
 者ハこの意を任せて事をささんこの前中立之ことを得る者なかるべし彼ハ美しき地に到らんこの地
 がために荒さるべし彼の全國の力を盡して打入んこの面をこれれ向へければまたこれぞ和知を亦
 して婦人の女子を之に興らん然るにこの婦人の女子ハ之がために身を滅ぼすに至り何事をも成わたり
 臺も彼ののために益する所なかるべし彼またこの面を島々にむけて之を多く取ん茲に一人の大將わたり

千四百二
 千四百一
 千四百
 千三百九十九
 千三百九十八
 千三百九十七
 千三百九十六
 千三百九十五
 千三百九十四
 千三百九十三
 千三百九十二
 千三百九十一
 千三百九十
 千三百八十九
 千三百八十八
 千三百八十七
 千三百八十六
 千三百八十五
 千三百八十四
 千三百八十三
 千三百八十二
 千三百八十一
 千三百八十
 千三百七十九
 千三百七十八
 千三百七十七
 千三百七十六
 千三百七十五
 千三百七十四
 千三百七十三
 千三百七十二
 千三百七十一
 千三百七十
 千三百六十九
 千三百六十八
 千三百六十七
 千三百六十六
 千三百六十五
 千三百六十四
 千三百六十三
 千三百六十二
 千三百六十一
 千三百六十
 千三百五十九
 千三百五十八
 千三百五十七
 千三百五十六
 千三百五十五
 千三百五十四
 千三百五十三
 千三百五十二
 千三百五十一
 千三百五十
 千三百四十九
 千三百四十八
 千三百四十七
 千三百四十六
 千三百四十五
 千三百四十四
 千三百四十三
 千三百四十二
 千三百四十一
 千三百四十
 千三百三十九
 千三百三十八
 千三百三十七
 千三百三十六
 千三百三十五
 千三百三十四
 千三百三十三
 千三百三十二
 千三百三十一
 千三百三十
 千三百二十九
 千三百二十八
 千三百二十七
 千三百二十六
 千三百二十五
 千三百二十四
 千三百二十三
 千三百二十二
 千三百二十一
 千三百二十
 千三百一十九
 千三百一十八
 千三百一十七
 千三百一十六
 千三百一十五
 千三百一十四
 千三百一十三
 千三百一十二
 千三百一十一
 千三百一十
 千三百九
 千三百八
 千三百七
 千三百六
 千三百五
 千三百四
 千三百三
 千三百二
 千三百一
 千三百

彼が興へたる恥辱を雪さるの恥辱をかれの身に興へかへさんかくて彼の面を自己の國の城々に向ん
 而して終に躰き仆れて亡ん彼に代りて興る者ハ榮光の國に人を出して租税を征斂せめん但し彼ハ忿怒
 小も戰鬥もよらずして數日の内に滅じんまた之をかざりて起る者ハ賤まるく者として國の尊榮これ
 に歸せざらん然れども彼不意に來り巧言をめて國を獲ん洪水のごとき軍勢がこれのために押流されて欺
 れん契約の君たる者も然らん彼ハ之に契約をむすびて後詭計を行ひ上りきたりて僅少の民をもて勢を
 得ん彼すなごし不意おきたりてこの國の膏腴なる處に攻りこの父もこの父の父も爲ざりしごころの
 事を告げん彼ハこの奪ひたる物掠めたる物および財寶を衆人の中に散すべし彼ハ謀略をめぐらして堅固
 なる城々を攻取べし時の至るまで斯のごとくならん彼ハこの勢力を奮ひ心を勵まし大軍を率へて南の
 王に攻よせん南の王もまた自ら奮ひ甚だ大なる強き軍勢をもて迎へ戦かえり然れども謀略をめぐらして攻
 が故にこれに當ることを得ざるべしすなごち彼の珍膳を興り食ふ者彼を倒ざんこの軍兵溢れん打死す
 る者衆かるべし此二人が王ハ害をささんご心にし之が同席に共に食して詭計を言ん然れどもこの志
 ざるべし定まれる時のいたるまでハ其事終らじ彼ハ莫大の財寶をもちて自己ハ國を歸らん彼ハ聖約
 敵する心を懷きて事をさし而してこの國をかへらん定まれる時わたりて彼また進みて南に到らん然
 どのの構機ハ先の摸機れどくからざらん即ちキアラの船がこれに到るべければ彼力をかざして還り
 聖約わむかひて忿怒をもらして事をささん而して彼歸りゆき聖約を棄る者ど相識らん彼より腕かてり
 て聖所すなご堅城を巧し常供の物を撤除かせかつ殘暴可惡物を立ん彼ハ之を契約に關て罪を獲る者
 等を巧言をもて引誘して背かせん然ぞの神を知る人々ハありて事をささん民の中の聖賢者等衆多

千四百二
 千四百一
 千四百
 千三百九十九
 千三百九十八
 千三百九十七
 千三百九十六
 千三百九十五
 千三百九十四
 千三百九十三
 千三百九十二
 千三百九十一
 千三百九十
 千三百八十九
 千三百八十八
 千三百八十七
 千三百八十六
 千三百八十五
 千三百八十四
 千三百八十三
 千三百八十二
 千三百八十一
 千三百八十
 千三百七十九
 千三百七十八
 千三百七十七
 千三百七十六
 千三百七十五
 千三百七十四
 千三百七十三
 千三百七十二
 千三百七十一
 千三百七十
 千三百六十九
 千三百六十八
 千三百六十七
 千三百六十六
 千三百六十五
 千三百六十四
 千三百六十三
 千三百六十二
 千三百六十一
 千三百六十
 千三百五十九
 千三百五十八
 千三百五十七
 千三百五十六
 千三百五十五
 千三百五十四
 千三百五十三
 千三百五十二
 千三百五十一
 千三百五十
 千三百四十九
 千三百四十八
 千三百四十七
 千三百四十六
 千三百四十五
 千三百四十四
 千三百四十三
 千三百四十二
 千三百四十一
 千三百四十
 千三百三十九
 千三百三十八
 千三百三十七
 千三百三十六
 千三百三十五
 千三百三十四
 千三百三十三
 千三百三十二
 千三百三十一
 千三百三十
 千三百二十九
 千三百二十八
 千三百二十七
 千三百二十六
 千三百二十五
 千三百二十四
 千三百二十三
 千三百二十二
 千三百二十一
 千三百二十
 千三百一十九
 千三百一十八
 千三百一十七
 千三百一十六
 千三百一十五
 千三百一十四
 千三百一十三
 千三百一十二
 千三百一十一
 千三百一十
 千三百九
 千三百八
 千三百七
 千三百六
 千三百五
 千三百四
 千三百三
 千三百二
 千三百一
 千三百

人々を敬ふをあらん然らば彼らハ暫時其間にかり火にやかれ擄はれ擄められ等して仆れん
 作る時わたりて彼らハ少シ扶助を獲ん又衆多の人許りて彼らハ合せん 又主は聖者等の中おもゆる
 る者わらん斯のごとく彼らの中に試むる事浄むる事潔くする事かてあされて終の時いたらん即ち定
 むる時まで然るべし 此王の意のまじに事をかてき以萬の神に逾て自己を高くし自己を大いにし神
 神の神たる者にむかひて大言を吐き等して忿怒の息ひ時までも其の志を得ん其の定まれるこの事
 成さるべからざればかり 彼りの先祖の神々を願ひて婦女の愉快を思はずまた何の神をも願ひざらん
 其ハ彼一切に逾て自己を大いにすれん 彼ハ之の代に軍神を崇め金銀珠玉および寶物をもてその先
 祖等の譏らひし神を崇めんと 彼のどの異邦の神に由り要害の城々にむかひて事を爲ん凡て彼を尊ぶ者
 ハ彼加入るに樂を以て之をして衆多の人を治めしめ土地をこれに分ち與へて賞賜とせん 終の時いた
 りて南の王使と戦へん北の王ハ車と馬と衆多の船をもて大風のごとく之に攻寄せ國に打りて潮のごと
 く溢れ抄らん 彼ハまた美じき國に進み入る彼のためには多かる者多かるべし然してエバムアゴラモッ
 人の中の第一なる者なはり 彼の手を免かれん 彼國々にその手を伸びん エシマの地も免かれん
 彼ハ遂にエシマの金銀財寶を手わいれん リアエ人とエラヒア人の後に彼を北より執
 知を得て周旋ふためき衆多の人を滅ぼし絶へんと大急ぎにて出ゆかん 彼ハ海の間において美しき聖山に
 天幕の宮殿をまつらんと然して彼つひよりの終わいたらん之を助けん者なかるべし
第五十四節 此の時汝の民の人々のために立ちてこの大なる君シカエル起あがらん是艱難の時なり國
 わりてより以來の時にいたるまで斯る艱難ありし事かあるべし この時汝の民ハ救はれん即ち書かする

一 聖一〇五
 二 聖一〇六
 三 聖一〇七
 四 聖一〇八
 五 聖一〇九
 六 聖一一〇
 七 聖一一一
 八 聖一一二
 九 聖一一三
 一〇 聖一一四
 一一 聖一一五
 一二 聖一一六
 一三 聖一一七
 一四 聖一一八
 一五 聖一一九
 一六 聖一二〇
 一七 聖一二一
 一八 聖一二二
 一九 聖一二三
 二〇 聖一二四
 二一 聖一二五
 二二 聖一二六
 二三 聖一二七
 二四 聖一二八
 二五 聖一二九
 二六 聖一三〇
 二七 聖一三一
 二八 聖一三二
 二九 聖一三三
 三〇 聖一三四
 三一 聖一三五
 三二 聖一三六
 三三 聖一三七
 三四 聖一三八
 三五 聖一三九
 三六 聖一四〇
 三七 聖一四一
 三八 聖一四二
 三九 聖一四三
 四〇 聖一四四
 四一 聖一四五
 四二 聖一四六
 四三 聖一四七
 四四 聖一四八
 四五 聖一四九
 四六 聖一五〇
 四七 聖一五一
 四八 聖一五二
 四九 聖一五三
 五〇 聖一五四
 五一 聖一五五
 五二 聖一五六
 五三 聖一五七
 五四 聖一五八
 五五 聖一五九
 五六 聖一六〇
 五七 聖一六一
 五八 聖一六二
 五九 聖一六三
 六〇 聖一六四
 六一 聖一六五
 六二 聖一六六
 六三 聖一六七
 六四 聖一六八
 六五 聖一六九
 六六 聖一七〇
 六七 聖一七一
 六八 聖一七二
 六九 聖一七三
 七〇 聖一七四
 七一 聖一七五
 七二 聖一七六
 七三 聖一七七
 七四 聖一七八
 七五 聖一七九
 七六 聖一八〇
 七七 聖一八一
 七八 聖一八二
 七九 聖一八三
 八〇 聖一八四
 八一 聖一八五
 八二 聖一八六
 八三 聖一八七
 八四 聖一八八
 八五 聖一八九
 八六 聖一九〇
 八七 聖一九一
 八八 聖一九二
 八九 聖一九三
 九〇 聖一九四
 九一 聖一九五
 九二 聖一九六
 九三 聖一九七
 九四 聖一九八
 九五 聖一九九
 九六 聖二〇〇
 九七 聖二〇一
 九八 聖二〇二
 九九 聖二〇三
 一〇〇 聖二〇四

されたる者ハみな救はれん また地の下も睡りたる者の中衆多の者目を醒さるの中永生を得る者
 ありまた厭虜を蒙りて限なく蓋る者あるべし 頑愾者ハ空け光輝のごとくに耀かんとまた衆多の人を議
 導ける者ハ星のごとくありて永遠にいらん 又ニエールも終末の時まで此言を秘し此書を封じおけ衆多
 の者跋渉らん而して知識増へしと 茲に我々ニエール觀ん別なまた二箇の者ありて一箇ハ河の此岸の岸に
 わり一箇ハ河の彼岸の岸にありける 一箇の者の布の衣を衣て河の水の上を立る人ハむかひて
 言り此奇跡ハ何の時わいたりて終るべきやと 我聞にかの布の衣を衣て河の水の上を立る人ハむかひ
 てその右れ手と左の手を擧げ永久に生る者をして誓ひて言りその間ハ一時と二時と半時なり聖民の手の
 碎くるごとき終らん時に是等の事みな終るべしと 我聞たれども曉るごときを得ざりき我また言りわが主よ
 是等の事の終り何なりと 彼はいひけるニエール言へ終極の時まで秘しかつ封じ置るべしと 衆
 多の者淨められ潔くせられ試みられん然して惡き者ハ惡き事を行ふと人惡き者ハ一人も曉るごとき無るべ
 し然して頑愾者ハ曉るべし 常供の物を除き殘暴可惡者を立ん期よりして一千二百九十日あるん 待せり
 て一千三百二十五日お至る者ハ幸福なり 汝終りお進み行け汝ハ安息に入り日の終りに至り起て汝の分
 を享ん

一 聖二〇五
 二 聖二〇六
 三 聖二〇七
 四 聖二〇八
 五 聖二〇九
 六 聖二一〇
 七 聖二一一
 八 聖二一二
 九 聖二一三
 一〇 聖二一四
 一一 聖二一五
 一二 聖二一六
 一三 聖二一七
 一四 聖二一八
 一五 聖二一九
 一六 聖二二〇
 一七 聖二二一
 一八 聖二二二
 一九 聖二二三
 二〇 聖二二四
 二一 聖二二五
 二二 聖二二六
 二三 聖二二七
 二四 聖二二八
 二五 聖二二九
 二六 聖二三〇
 二七 聖二三一
 二八 聖二三二
 二九 聖二三三
 三〇 聖二三四
 三一 聖二三五
 三二 聖二三六
 三三 聖二三七
 三四 聖二三八
 三五 聖二三九
 三六 聖二四〇
 三七 聖二四一
 三八 聖二四二
 三九 聖二四三
 四〇 聖二四四
 四一 聖二四五
 四二 聖二四六
 四三 聖二四七
 四四 聖二四八
 四五 聖二四九
 四六 聖二五〇
 四七 聖二五一
 四八 聖二五二
 四九 聖二五三
 五〇 聖二五四
 五一 聖二五五
 五二 聖二五六
 五三 聖二五七
 五四 聖二五八
 五五 聖二五九
 五六 聖二六〇
 五七 聖二六一
 五八 聖二六二
 五九 聖二六三
 六〇 聖二六四
 六一 聖二六五
 六二 聖二六六
 六三 聖二六七
 六四 聖二六八
 六五 聖二六九
 六六 聖二七〇
 六七 聖二七一
 六八 聖二七二
 六九 聖二七三
 七〇 聖二七四
 七一 聖二七五
 七二 聖二七六
 七三 聖二七七
 七四 聖二七八
 七五 聖二七九
 七六 聖二八〇
 七七 聖二八一
 七八 聖二八二
 七九 聖二八三
 八〇 聖二八四
 八一 聖二八五
 八二 聖二八六
 八三 聖二八七
 八四 聖二八八
 八五 聖二八九
 八六 聖二九〇
 八七 聖二九一
 八八 聖二九二
 八九 聖二九三
 九〇 聖二九四
 九一 聖二九五
 九二 聖二九六
 九三 聖二九七
 九四 聖二九八
 九五 聖二九九
 九六 聖三〇〇
 九七 聖三〇一
 九八 聖三〇二
 九九 聖三〇三
 一〇〇 聖三〇四

一節一
 二節一
 三節一
 四節一
 五節一
 六節一
 七節一
 八節一
 九節一
 十節一
 十一節一
 十二節一
 十三節一
 十四節一
 十五節一
 十六節一
 十七節一
 十八節一
 十九節一
 二十節一
 二十一節一
 二十二節一
 二十三節一
 二十四節一
 二十五節一
 二十六節一
 二十七節一
 二十八節一
 二十九節一
 三十節一
 三十一節一
 三十二節一
 三十三節一
 三十四節一
 三十五節一
 三十六節一
 三十七節一
 三十八節一
 三十九節一
 四十節一
 四十一節一
 四十二節一
 四十三節一
 四十四節一
 四十五節一
 四十六節一
 四十七節一
 四十八節一
 四十九節一
 五十節一

何西阿書

一節一
 二節一
 三節一
 四節一
 五節一
 六節一
 七節一
 八節一
 九節一
 十節一
 十一節一
 十二節一
 十三節一
 十四節一
 十五節一
 十六節一
 十七節一
 十八節一
 十九節一
 二十節一
 二十一節一
 二十二節一
 二十三節一
 二十四節一
 二十五節一
 二十六節一
 二十七節一
 二十八節一
 二十九節一
 三十節一
 三十一節一
 三十二節一
 三十三節一
 三十四節一
 三十五節一
 三十六節一
 三十七節一
 三十八節一
 三十九節一
 四十節一
 四十一節一
 四十二節一
 四十三節一
 四十四節一
 四十五節一
 四十六節一
 四十七節一
 四十八節一
 四十九節一
 五十節一

何西阿書

一節一
 二節一
 三節一
 四節一
 五節一
 六節一
 七節一
 八節一
 九節一
 十節一
 十一節一
 十二節一
 十三節一
 十四節一
 十五節一
 十六節一
 十七節一
 十八節一
 十九節一
 二十節一
 二十一節一
 二十二節一
 二十三節一
 二十四節一
 二十五節一
 二十六節一
 二十七節一
 二十八節一
 二十九節一
 三十節一
 三十一節一
 三十二節一
 三十三節一
 三十四節一
 三十五節一
 三十六節一
 三十七節一
 三十八節一
 三十九節一
 四十節一
 四十一節一
 四十二節一
 四十三節一
 四十四節一
 四十五節一
 四十六節一
 四十七節一
 四十八節一
 四十九節一
 五十節一

何西阿書

んがら斯かしてかれにその面より淫行を除かせその乳房の間より姦淫をのぞかしめよ三然しからされば我がかれを刺して赤體あかだにして生れいでたる日のごとくにしてまた荒野のごとくならしめ潤ひなき地のごとくならしめ

必かなくによりて死しめしめん我がの子等を憐あはれに淫行の子等を憐あはれに五かれらの母淫行をなせりかれらを生る者ハ恥はべき事をおこなへり蓋かかれいへる言ことあり我がハが戀人等につきまてがと之を彼らハわがパン

をふさぎ垣をたてて彼にその徑を支さらしむべし彼ハその戀人たちの後をまたひゆけども追及おひ追

かく之をたづぬれども遇あはさし是に於いて彼いどん我がゆきてわが前の夫にかへるべしかのときわが

状態あひ今にまざりて善よりきと彼が得る穀物と酒と油あひわが與ふるどころ彼がハアルのために用ゐたる

金銀かねハわが彼に増わたしたるどころなるを彼がハ奪うりてこれによりて我がハが穀物あをその地におよ

びて奪うひわが酒をその季にいたりてうひ又かれの裸體をおはんに用いうべきわが羊毛あよびわが麻あをど

らん今われかれの恥るところをその戀人等の目めのまへに露あすべし彼をわが手より奪うふものあらじ

我がかれがすべての喜樂よろこぶことと祝筵いそ新月のいと安息日やすぶが一切の節會を去て息あめめんまた彼の葡

萄ぶどうの樹と無花果なしをうごかさん彼がさきに此等ことをさしてわが戀人この我がはわたへし賞賜ありと言いしがわかれ

れを林やしとあし野のの野をうごかさん五われかれが耳環みみ頸玉のどなどを掛かけての戀人こを去たひゆき我がを

わすれ香かをたきて事ことへしもうろくのアルの日のゆゑをあるの罪を罰なせんエホバハかく言いたをふ十欺かる

がゆゑに我がかれを誅なして荒野にみちびきいり終はりかれの心をなぐさめ かしこを出るや直ただちにわれかれ

にその葡萄園ぶどうを與あへアル（患難）の谷を望のぞみてわたへん彼がハわかくうと時のごとくエホバの

一 出十五〇
二 出十五〇
三 出十五〇
四 出十五〇
五 出十五〇
六 出十五〇
七 出十五〇
八 出十五〇
九 出十五〇
十 出十五〇
十一 出十五〇
十二 出十五〇
十三 出十五〇
十四 出十五〇
十五 出十五〇
十六 出十五〇
十七 出十五〇
十八 出十五〇
十九 出十五〇
二十 出十五〇
二十一 出十五〇
二十二 出十五〇
二十三 出十五〇
二十四 出十五〇
二十五 出十五〇
二十六 出十五〇
二十七 出十五〇
二十八 出十五〇
二十九 出十五〇
三十 出十五〇
三十一 出十五〇
三十二 出十五〇
三十三 出十五〇
三十四 出十五〇
三十五 出十五〇
三十六 出十五〇
三十七 出十五〇
三十八 出十五〇
三十九 出十五〇
四十 出十五〇
四十一 出十五〇
四十二 出十五〇
四十三 出十五〇
四十四 出十五〇
四十五 出十五〇
四十六 出十五〇
四十七 出十五〇
四十八 出十五〇
四十九 出十五〇
五十 出十五〇

一 出十五〇
二 出十五〇
三 出十五〇
四 出十五〇
五 出十五〇
六 出十五〇
七 出十五〇
八 出十五〇
九 出十五〇
十 出十五〇
十一 出十五〇
十二 出十五〇
十三 出十五〇
十四 出十五〇
十五 出十五〇
十六 出十五〇
十七 出十五〇
十八 出十五〇
十九 出十五〇
二十 出十五〇
二十一 出十五〇
二十二 出十五〇
二十三 出十五〇
二十四 出十五〇
二十五 出十五〇
二十六 出十五〇
二十七 出十五〇
二十八 出十五〇
二十九 出十五〇
三十 出十五〇
三十一 出十五〇
三十二 出十五〇
三十三 出十五〇
三十四 出十五〇
三十五 出十五〇
三十六 出十五〇
三十七 出十五〇
三十八 出十五〇
三十九 出十五〇
四十 出十五〇
四十一 出十五〇
四十二 出十五〇
四十三 出十五〇
四十四 出十五〇
四十五 出十五〇
四十六 出十五〇
四十七 出十五〇
四十八 出十五〇
四十九 出十五〇
五十 出十五〇

國くにより上ありきたりし時のごとくかして歌うたうたさんエホバ言いたまふその日にハかんが我がをふたじが

アルとよばずしてイ（吾夫）とよばん我がもろろのアルの名をかれが口よりどりのなき重かさねてろ

の名を世に記憶おぼせらるゝこと無なく云いめんうの日にハ我がから我が民たのために野のの野をうごかさん

の昆蟲はと誓約ちかをむすびまた弓箭きうをむすび戦争せんを全世界ぜんよりつぎ彼らをして安やすかに居すまひべし

をめぐりて永遠とこにいたらん公義こうと公平へいと愛あいと憐あれとをなすを娶めり かしこをなき眞實まことをもて

汝なんをめぐりて汝なんを愛あいらんエホバい給たまふその日われ應こたへん我がハ天あまの地にたへ

地の穀物あと酒さけと油あに應こたへんエホバに應こたへん我がわがためにかれを地に置き置おき置おき

うし者ものをおそれかみわが民たならずも者ものにむかひて汝なんハわが民たありどいはんかれらハ我がにむかひて汝なんハ

神かみなりといさん

エホバわれに言い給たまひける汝なんはたじが住すむエホバも愛あいせらるれども轉かてはかのもろくの神

にむかひ葡萄の葉はを愛あいするアルの子孫このごとくうのつれうふものに愛あいせらるれども姦淫あをかく

かふ婦人めをわいせよ われ銀十五枚いおほひき一ホメル半はんをもてわが爲ためにその婦人めを受うたり 我がこれにい

ひける汝なんははくの日わがためにどまりて淫行あをすこととあて他人たの人にゆくとあかれ我がもまた汝なんに

むかひて然しかせんアルの子孫こは多くの日王あなく君きみなく犠牲いけなく妻め柱はしらなくエホバもまた汝なんに

して居すらんその後アルの子孫こハかへりてその神かみエホバその王あがヒテをたうねもどめ未日あにその

のきてエホバその恩恵めぐみどにむかひてゆかん

アルの子孫ことエホバの言ことを聴きけエホバこの地に住すむ者ものと爭あひたせよ其その此地このにハ誠まことを

なく愛情なく神を知る事なればかりたを誣ひ偽り凶殺盗み姦淫のみにして互に相襲ひ血につまき
 流るこのゆゑにこの地うれひに去つみ之にすむものみ本野のけもの空のとりどるとどわおどろへ海の
 魚もまた絶はてんされど何人もあらうふべからすいまむ可らず汝の民の祭司と争ふ者の如くなり
 来て亡びるなんぢ知識を棄てるによりて我もまた汝を棄てわが祭司たらしめて汝のおの神の律法を思
 るふよりて我もなんぢの子等を忘れん彼ら大あるに去たがひてます我も罪を犯せば我かれらの
 樂を辱に變らん彼らわが民の罪をくらし心をかたむけてその罪をわがすを願へりこのゆゑに民の遇
 ふどころの祭司もまた同じわれらの途をかれらにきたらせしるの行爲をもて之にむくゆべしかれらの食
 へども飽せず淫行をおせせしるの數まさすの心をエホバにとどむることを止れなかり淫行と酒と新しき
 酒の人の心をうばふわが民本にむかひて事をどろの杖かれらに事をなすはかれら淫行の靈に
 まよひおそれの神の下を離れて淫行を爲すあり彼ら山々の巔にて犧牲を獻げ岡の上にて香を焚き楡
 樹楊樹栗樹の下にてこの事をおこなふ此の樹蔭の美しきによりてなりこゝをもてかえちの女子の
 淫行をなしたなんぢらの見婦の姦淫をおこなふ我なんぢらのむすめ淫行をおせせども罰せずなんぢらの見
 婦かたいたをおこなへん思も刑せし其のなんぢらもみづから離れゆきて妓女どもに居り淫婦どももわが
 物をうかふればなり悟らざる民はほろろふべしエホバに汝淫行をなすどもに罪を犯さざる勿れ
 ギルガルに往かかれベテラエツに上るなかれエホバは活くといて誓ふなかれエホバに頑強なる牛
 のてどくお頑強なり今エホバは羔羊を以てなき野にはあてたるが如くして之を牧せんエホバに偶像にむ

すびつらなれりの爲にまかせよかれらば酒くされかれらの淫行やまずかれらの楯となるべき者
 等入恥を愛しいたく之を變せりかれ風の翼につつまれかれらの禮物によりて恥辱をかうむらん
 祭司等よこれ聴けエホバは家よ耳をかたむけよ王のいへよ之にこゝろを注ぎばきり
 汝等にのろせんろなんぢらハエホバを設く羅ゴボルに張る綱れてどくなれなかり 轉逆者ハエホバに
 罪を犯すはたしめん 我ハエホバを知るエホバハわれに懲るくどころ
 おまふみたり我かれらとどくとく徳しめん 我ハエホバを知るエホバハわれに懲るくどころ
 無しエホバに今や今や淫行をなせりエホバを知らざりて淫行の靈の裏にありてエホバを知ることおかれなかり
 てるの神を歸ること能はざりしむるの淫行の靈の裏にありてエホバを知ることおかれなかり
 エホバの驕傲の面にむかひて罪を犯しよ罪によりてエホバを知らざりて淫行の靈の裏にありてエホバを知ることおかれなかり
 どもにたえん かれら羊のむれ牛の群をたづなへてエホバを尋求めん然とてあふことおらじエホバ
 既にかれらより離れ給ひたれなかりかきらエホバにむかひ貞操を守りし他人の子を産り新月かき
 らどろの産業をどよもに滅ぼさん なんぢらエホバにおて角を入きラエにてラツバを吹ならしむラエツ
 にて呼さりて言へベエエエよなんぢの後にありと罰せらるる日にエホバに荒廢れん我エホバ
 エホバの支派の中かならず有べきことを罪せり エホバの牧伯等ハ境界をつつすものごとくなれり我
 わが震怒を水のごとくに彼らのうへに擲がん エホバに甘んじて人のさだめたるどころに從ひわゆ
 むひゆゑに鞆をうけて虐げられ辱らん 我ハエホバに人盡のてどくエホバの家には腐朽のごとし
 エホバに病あるを見エホバのれに傷あるをみたり斯てエホバに病あるをみたり 斯てエホバに病あるをみたり
 王に人をつかしてたれぞ彼ハなんぢを醫すことをえず又なんぢらの傷をのりさるることを得ざるべし

すびつらなれりの爲にまかせよかれらば酒くされかれらの淫行やまずかれらの楯となるべき者
 等入恥を愛しいたく之を變せりかれ風の翼につつまれかれらの禮物によりて恥辱をかうむらん
 祭司等よこれ聴けエホバは家よ耳をかたむけよ王のいへよ之にこゝろを注ぎばきり
 汝等にのろせんろなんぢらハエホバを設く羅ゴボルに張る綱れてどくなれなかり 轉逆者ハエホバに
 罪を犯すはたしめん 我ハエホバを知るエホバハわれに懲るくどころ
 おまふみたり我かれらとどくとく徳しめん 我ハエホバを知るエホバハわれに懲るくどころ
 無しエホバに今や今や淫行をなせりエホバを知らざりて淫行の靈の裏にありてエホバを知ることおかれなかり
 てるの神を歸ること能はざりしむるの淫行の靈の裏にありてエホバを知ることおかれなかり
 エホバの驕傲の面にむかひて罪を犯しよ罪によりてエホバを知らざりて淫行の靈の裏にありてエホバを知ることおかれなかり
 どもにたえん かれら羊のむれ牛の群をたづなへてエホバを尋求めん然とてあふことおらじエホバ
 既にかれらより離れ給ひたれなかりかきらエホバにむかひ貞操を守りし他人の子を産り新月かき
 らどろの産業をどよもに滅ぼさん なんぢらエホバにおて角を入きラエにてラツバを吹ならしむラエツ
 にて呼さりて言へベエエエよなんぢの後にありと罰せらるる日にエホバに荒廢れん我エホバ
 エホバの支派の中かならず有べきことを罪せり エホバの牧伯等ハ境界をつつすものごとくなれり我
 わが震怒を水のごとくに彼らのうへに擲がん エホバに甘んじて人のさだめたるどころに從ひわゆ
 むひゆゑに鞆をうけて虐げられ辱らん 我ハエホバに人盡のてどくエホバの家には腐朽のごとし
 エホバに病あるを見エホバのれに傷あるをみたり斯てエホバに病あるをみたり 斯てエホバに病あるをみたり
 王に人をつかしてたれぞ彼ハなんぢを醫すことをえず又なんぢらの傷をのりさるることを得ざるべし

われエフラヤに獅子のおどくエマの家に入りわかし獅子のおどし我も我ハ抓撻てさり掠めゆけど
 も救ふ者かかへるべし我ふたゞびわが處にかへりゆき敵らがるの罪をくいてひたすらわが面をたつね求
 むるやで其處おをらん敵ら難によりて我をたつねもどむることをせん

來れわれらエホバにかへるべしエホバわれらを抓撻たまひたれどもまた醫すことをなし我儕
 をうち給ひたきほまたその傷をつつむことを爲したまふ可れとなりエホバ二日のちわれらを活
 かへし三日われらを起させたまへん我らもうの前ふて生んこの故にわれらエホバををるべし切エホバ
 を知ることを求むべしエホバの曙光のごとく必ずあはれいで雨のごとくわれらわのみ後の雨のごと
 く地をうるはし給ふエフラヤよ我ななんち何をあさばんやエマよ我あなちは何をあさばんやあなちの愛
 情わしたの雲のごとくまたたらにきゆる露のごとしこのゆゑにわれ預言者等をもてかまらを撃ち
 わが口の言をもてかまらを殺せりわが審判わらされいづる光明のごとしわれハ愛情をよつてびて儀
 性をよらごをす神ををるを憐れごど燔祭おまさき色り然るも彼らハエマのごとく誓をやぶりかしてわ
 て不義をわきにおこなへりギレアテの惡を爲こふものよ邑わして血の足跡のあかに痛し祭司の
 どもがら山賊の群れのごとくまたやちして人なごてなひエマに往く大路わて人をころす彼等ハかくの
 どき惡きことをおこなへりわきエマのいへお憎むべきことあるを見たりかの處にてエフラヤ
 ハ淫をおこなふエマの汚たりエマよ我わが民の俘囚をかへさんごまた汝のためにも種別を
 ろなへん

第七言 されエマを醫さんごエマの怨どサマリアのわしきわさど露なるかまらに詐詭

ナ 卷五十四 第二七六
 一 卷五十四 第二七六
 二 卷五十四 第二七六
 三 卷五十四 第二七六
 四 卷五十四 第二七六
 五 卷五十四 第二七六
 六 卷五十四 第二七六
 七 卷五十四 第二七六
 八 卷五十四 第二七六
 九 卷五十四 第二七六
 十 卷五十四 第二七六
 十一 卷五十四 第二七六
 十二 卷五十四 第二七六
 十三 卷五十四 第二七六
 十四 卷五十四 第二七六
 十五 卷五十四 第二七六
 十六 卷五十四 第二七六
 十七 卷五十四 第二七六
 十八 卷五十四 第二七六
 十九 卷五十四 第二七六
 二十 卷五十四 第二七六
 二十一 卷五十四 第二七六
 二十二 卷五十四 第二七六
 二十三 卷五十四 第二七六
 二十四 卷五十四 第二七六
 二十五 卷五十四 第二七六
 二十六 卷五十四 第二七六
 二十七 卷五十四 第二七六
 二十八 卷五十四 第二七六
 二十九 卷五十四 第二七六
 三十 卷五十四 第二七六
 三十一 卷五十四 第二七六
 三十二 卷五十四 第二七六
 三十三 卷五十四 第二七六
 三十四 卷五十四 第二七六
 三十五 卷五十四 第二七六
 三十六 卷五十四 第二七六
 三十七 卷五十四 第二七六
 三十八 卷五十四 第二七六
 三十九 卷五十四 第二七六
 四十 卷五十四 第二七六
 四十一 卷五十四 第二七六
 四十二 卷五十四 第二七六
 四十三 卷五十四 第二七六
 四十四 卷五十四 第二七六
 四十五 卷五十四 第二七六
 四十六 卷五十四 第二七六
 四十七 卷五十四 第二七六
 四十八 卷五十四 第二七六
 四十九 卷五十四 第二七六
 五十 卷五十四 第二七六

をかね以内にハ偷盜するあり外ハ山賊のむれ掠めざるありかまら心わがらの一切の惡をえたり
 めたることを思ふ今今の行為をかまらを圍みふさぎて皆わが目前わがかりかれらハこの惡をもて王を
 憐れせりこの詐詭をもてわがの牧伯を憐れさせりかれらハ女が淫を爲こふ者おしてバツを作る
 ものお焼く爐のごとし捫腕をてねてその發酵ごまごまをたく火をおこすことをせざるのみありわ
 ちの王の日もあるの牧伯ハ酒の熱よりて疾し王ハ嘲けるものどもに手を伸ぶかまら伏伺す
 るはごに心を爐のごとして備をなすそのバツを焼くものハ終夜ねむりおつき朝に島よべまた煙ので
 どく燃ゆかまらハみ爐のごとくに熱してその審士をやくものもろくは王ハみお作るかれらの中
 ハ我をよぶもの一人だおかしエフラヤハ異邦人にいませるエフラヤハかへさざる敵となり
 かれハ他邦人ハその力をのまるとも之をえらさ白髪りの身に難り生れどもこれをどらさ一ム
 ラエルの驕傲の面にむかひて証をかまら此もろくの事おれざるの神エホバに歸ることを
 せず又もどむることをせざるなりエフラヤハ智慧あかくして愚なる鶴のごとし彼等ハエホバにむか
 ひて呼求めたアスリヤに往く我かれらの往どきわが網をろの上にはりて天空の鳥のごとくに引墮
 し前わがの公會お告しごどくかれらに懲えめん禍あるかおかまら我をえさきて迷ひいでたり敗壞か
 きらにきたらんかまらハ我にむかひて罪を赦かしたり我かまらを贈えたとおもへどもかれら我におから
 ひて謊言をいへりかれら誠心をもて我をよめず唯牀にありて哀號べりかれらハ穀物とあたらしき酒の
 ゆゑをもて相集りかつわきに逆らふ我かれらを敵への腕をつよくせじかまら彼らハ我をよむどりて
 惡きことを謀るかれらハ隣るされせも至高者にかへらず彼らいたのみがたき白のごとし彼らのもも

ナ 卷五十四 第二七六
 一 卷五十四 第二七六
 二 卷五十四 第二七六
 三 卷五十四 第二七六
 四 卷五十四 第二七六
 五 卷五十四 第二七六
 六 卷五十四 第二七六
 七 卷五十四 第二七六
 八 卷五十四 第二七六
 九 卷五十四 第二七六
 十 卷五十四 第二七六
 十一 卷五十四 第二七六
 十二 卷五十四 第二七六
 十三 卷五十四 第二七六
 十四 卷五十四 第二七六
 十五 卷五十四 第二七六
 十六 卷五十四 第二七六
 十七 卷五十四 第二七六
 十八 卷五十四 第二七六
 十九 卷五十四 第二七六
 二十 卷五十四 第二七六
 二十一 卷五十四 第二七六
 二十二 卷五十四 第二七六
 二十三 卷五十四 第二七六
 二十四 卷五十四 第二七六
 二十五 卷五十四 第二七六
 二十六 卷五十四 第二七六
 二十七 卷五十四 第二七六
 二十八 卷五十四 第二七六
 二十九 卷五十四 第二七六
 三十 卷五十四 第二七六
 三十一 卷五十四 第二七六
 三十二 卷五十四 第二七六
 三十三 卷五十四 第二七六
 三十四 卷五十四 第二七六
 三十五 卷五十四 第二七六
 三十六 卷五十四 第二七六
 三十七 卷五十四 第二七六
 三十八 卷五十四 第二七六
 三十九 卷五十四 第二七六
 四十 卷五十四 第二七六
 四十一 卷五十四 第二七六
 四十二 卷五十四 第二七六
 四十三 卷五十四 第二七六
 四十四 卷五十四 第二七六
 四十五 卷五十四 第二七六
 四十六 卷五十四 第二七六
 四十七 卷五十四 第二七六
 四十八 卷五十四 第二七六
 四十九 卷五十四 第二七六
 五十 卷五十四 第二七六